

国立国語研究所学術情報リポジトリ

家庭における子どもの談話の脱文脈度の観点からの分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-11-13 キーワード (Ja): 修辞機能, 脱文脈化, 談話分析, 子ども会話コーパス キーワード (En): rhetorical function, decontextulization, discourse analysis, children's corpus 作成者: 田中, 弥生, 小磯, 花絵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000386

家庭における子どもの談話の脱文脈度の観点からの分析

田中 弥生 (国立国語研究所 研究系) *

小磯 花絵 (国立国語研究所 研究系)

Analysis of a Child's Discourse at Home from the Perspective of Decontextualization

Yayoi TANAKA (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Hanae KOISO (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

本研究は、修辞機能分析の分類法による日常会話分析の一環として、家庭での子どもの談話について修辞機能を確認し、脱文脈度の観点から検討するものである。本発表では、現在構築中の『子ども版日本語日常会話コーパス』のプロジェクト内限定公開データから、家族での会話と親戚を交えた会話での修辞機能の出現、及び脱文脈度の様相を確認した。分析の結果、子どもが場面に応じた修辞機能を用いる傾向にあること、また、普段会わない親戚と話す機会を得て、子どもが興味のあるものについて説明したり質問されたりすることで脱文脈度の高い発話を生じやすくさせている可能性があることが確認された。

1. はじめに

本研究は、脱文脈度の観点からのコミュニケーション分析の一貫である。子どもの言語コミュニケーションは、語彙の理解や、発話構造、語用論的知識の発達など、さまざまな観点から研究が行われ、また、児童の発達や教室談話に関して、「脱文脈化」が議論されている(岩田ほか 1995, 橋本 2009)。「脱文脈化」やその概念は、話し言葉と書き言葉を対比させ、成長とともに論じられることも多い。岡本(1985)は、一次のことば、二次のことばという表現を用いて、子どもの言葉について述べている。一次のことばとは「現実生活の中であって、具体的な事象や事物について、その際の状況文脈にたよりながら、親しい人との直接的な会話のかたちで展開する言語活動」(岡本 1985:50)であって話し言葉が該当し、二次のことばとは「ある事象や事物について、それが実際に生じたり存在したりしている現実の場面を離れたところで、それらについてことばで表現」し、「コミュニケーションの対象が(略)自分と直接交渉のない未知の不特定多数者にむけて、さらには抽象化された聞き手一般を想定してことばを使うことが求められ(岡本 1985:50-51)、話し言葉のほかに書き言葉も該当するとしている。また、岩田ほか(1995)は、話し言葉は「相手の表情や身振り、発話のイントネーション、発話文脈といった手がかりに依存しながら日常のなかで自然と学ばれていく」のに対して、読み書き言葉は「対面的な文脈に依存することなく、言語の純粋に形式的な側面のみによっている」ため、「脱文脈的」であるとしている。

* yayoi@ninja.ac.jp

このような脱文脈化の程度を可視化できる「修辞機能分析」の分類法によって、本発表では、家庭での子どもの談話を対象に、家族との会話と親戚を交えた会話での修辞機能の出現と脱文脈度の様相を検討する。

本研究において修辞機能とは、「話し手書き手が発信する際に、言及する対象である事態や事物、人物等を捉え表現する様態を分類し概念化したもの」と定義する。また、脱文脈度は「発話がコミュニケーションの場「いま・ここ・わたし」にどの程度依存しているか」の程度を表す概念とする。

修辞機能分析の分類法は、選択体系機能言語理論の英語談話分析手法 Rhetorical Unit Analysis(Cloran 1994, 1999) を日本語に適用した修辞ユニット分析(佐野 2010, 佐野・小磯 2011) を元に、日本語文法の枠組みで修正を加えたものである(田中 2022)。テキストの分析単位(概ね、日本語文法の節に相当)ごとに、述部の時制と、主語・主題の話者からの距離の分類から修辞機能が特定され、あわせて脱文脈化指数が特定される。これによって、一般的な内容か個人的な内容か、発話の時空に依存しない内容か依存する内容か、抽象的なことか具体的なことか、などを示すことができる。例えば、幼児はまず目の前の「いま・ここ・わたし」に近いことについて話せるようになり、成長とともに過去や、明日のこと、その場にはいない友達や祖父母のことなど、時空を離れた発話ができるようになる。同じ時空にいる親に「それ、ちょうだい」と言うのは文脈化しており、「はやぶさは北海道新幹線だよ」と話すのは同じ時空にいらなくても伝えられるため脱文脈度が高い。

これまで、児童作文、家族の談話、職場の談話、高齢者グループの談話など(田中ほか 2021, 佐尾ほか 2023, 田中・小磯 2019, 田中 2017, 田中ほか 2022, 2023b) の分析から、目的や話題内容、状況によって用いられる修辞機能が異なり、脱文脈度が推移することなどが明らかになっている。田中・小磯(2019)では、修辞機能と脱文脈度の観点からの幼児の談話分析のケーススタディとして、家庭での食事場面における幼児と両親との会話の分析を行っている。その結果、食事場面においては基本的に脱文脈度の低い発話が交わされ、0~4歳の女児の発話の脱文脈度が高くなるのは、両親の発話をきっかけとするものであることが明らかになっている。また田中ほか(2023a)では、家庭での食事場面における親子の会話での、話題内容と年齢による違いについて分析し、食事の話題については脱文脈度が低く、食事以外の話題では内容に応じて脱文脈度が変換すること、また、2歳児は脱文脈度の低い会話には参加できるものの脱文脈度の高い会話には参加せず、7歳児は脱文脈度の高い発話を自ら発信できていることから、年齢と使用できる脱文脈度に関わりがあることが確認された。

本発表の目的は、家庭での家族との会話と親戚を含む会話における子どもの発話の修辞機能と脱文脈度の違いを明らかにすることである。現在国立国語研究所共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」(2022~2027年度)にて構築中の『子ども版日本語日常会話コーパス』のプロジェクト内限定公開データで、かつ2024年度中にモニター公開する予定のデータ(小磯ほか 2024)に収録されている談話を分析対象とし、言語表現から修辞機能と脱文脈化指数を特定した上で、修辞機能の使用と、脱文脈度の様相を検討する。以下、第2節で分析データと分析方法について説明し、第3節で分析結果、第4節で考察を述べ、第5節でまとめと今後の課題について述べる。

2. 分析データと分析方法

2.1 分析データ

本研究の分析対象として、現在国立国語研究所共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」(2022～2027年度)にて構築中の『子ども版日本語日常会話コーパス』(CEJC-Child)のプロジェクト内部公開データの内、同一協力世帯における家族での会話(Y010_002(12分05秒、家族4名)、Y010_003(17分28秒、家族4名))と親戚を交えた会話(Y010_005(28分24秒、家族4名+叔父1名の計5名))の書き起こしデータを用いる。年齢の違いによる影響を抑えるため、同時期(2ヶ月以内)に収録された3件の会話データを選択した。家族での会話は夕食時に収録されたもので、親戚を交えた会話は叔父が遊びに来た時に収録されたものである。子どもは2人で、兄が3歳、弟が1歳前であるが、分析データにおける弟の発話は喃語のみであったため、本分析では除外し、対象となる子どもは1人のみである。また、Y010_005の17分頃以降、母と弟は授乳のために席をはずしており、その後は叔父、父、兄の3人の会話となる。書き起こしデータの個人名はすべて仮名である。

2.2 分析方法

修辞機能分析の分類法の手順は次のとおりである。

1. 分析単位(メッセージ)に分割し、分析対象を特定する。
2. 分析対象であるメッセージについて発話機能を分類する。
3. 発話機能が「命題」のメッセージについて、時間要素と空間要素を分類する。
4. 発話機能・時間要素・空間要素の組み合わせから、修辞機能と脱文脈化指数を特定する。

以下に手順の概要を示す。

2.2.1 分析単位の分割と分析対象の特定

分析単位であるメッセージは概ね節に相当するが、連体修飾節は独立したメッセージとして扱わない。メッセージは「定型句類」(相槌、挨拶、定型句、節の形でないものなど)、「主節」(単文、及び主節)、「並列」(従属度の低い従属節)、「従属」(従属度の高い従属節)、「引用」(“と思う”などで引用されている部分)に分類する。「主節」、「並列」、「引用」についてこのあとの分類を行う。

2.2.2 発話機能・時間要素・空間要素

メッセージの種類が「主節」「並列」「引用」に分類されたメッセージについて、発話機能・時間要素・空間要素を分類する。表1に示したように、これらの組み合わせから修辞機能と脱文脈化指数が特定される。【行動】[01]がもっとも文脈に依存した表現で、【一般化】[14]がもっとも脱文脈度の高い表現である⁽¹⁾。

発話機能は「提言」か「命題」に分類する。「提言」は、品物・行為の交換に関する提供・命令で、基本的には同じ時空に存在する相手に働きかけたり、会話者同士の行為にかかわる発話内容が該当し、【行動】[01]と特定される。例えば、同じ時空にいる相手への「この花見て！」

⁽¹⁾ 以下、本文では修辞機能を【】で、脱文脈化指数を[]で示す

表1 発話機能・時間要素・空間要素からの修辞機能と脱文脈化指数の特定

定義	↑高↑空間的距離のレベル↓低						一般化 14
状況外		報告 09	状況外 回想 10	予測 11	推量 12	説明 13	
状況内		実況 02	状況内 回想 03	状況内予想 05		観測 08	
参加	行動 01			計画 04	状況内 推測 06	自己記述 07	
空間要素	今ここ わたし	←低 ← 時間的距離のレベル → 高					
時間要素		現在	過去	未来 意志的	未来 非意志的	仮定	習慣 ・恒久
発話機能	提言	命題					

「お醤油をどうぞ」のような、行為や物を要求、提供する場合である。「命題」は、情報を交換する陳述・質問で、「僕はスイカが大好き」「このスイカは真っ赤だね」「スイカはウリ科の植物だ」などが該当する。発話機能が「命題」であるメッセージについて、時間要素と空間要素を認定する。

時間要素は、話者のいる時間「いま」を基準として、メッセージで表現されている出来事がいつ起こったかを示す要素である。基本的にテンスや時間を表す副詞などによって表現され、「習慣・恒久」⁽²⁾、「現在」、「過去」、「未来意志的」、「未来非意志的」、「仮定」に分類する。

空間要素は、話者のいる場所「ここ・わたし」を基準として、メッセージの中心となる語句との空間的距離を示す要素で、主語、主題、述部の主体から判断し、「参加」「状況内」「状況外」「定義」に分類する。

2.2.3 修辞機能と脱文脈化度の特定

表1を参照し、発話機能、時間要素、空間要素の組み合わせから、修辞機能と脱文脈化指数を特定する。

2.2.4 アノテーション例

表2にY010_005よりアノテーション例を示す⁽³⁾。

表2 アノテーション例 (Y010_005の一部 1571.15~1587.29)

話者	発話	発話機能	時間要素	空間要素	修辞機能 [脱文脈化指数]
父	はやぶさとかこまちのほうが <u>新しいんだよね。</u>	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
かい	めちゃ新しい。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
父	そう。	(定型句類)			
父	だから <u>そっちがやっぱ優先されちゃうんだよな。</u>	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
父	<u>E三系は塗り直したから</u>	命題	過去	状況外	状況外回想 [10]
父	<u>結構人気あんだよ。</u>	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
かい	今。	(節の一部)			
かい	そう。	(定型句類)			
かい	そう。	(定型句類)			
かい	結構人気です。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
父	<u>結構人気あんだよ。</u>	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
靖広	<u>最大速度が低いの？。</u>	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
かい	そう。	(定型句類)			
かい	ちょっと貸して。	提言			行動 [01]

(2) 「習慣・恒久」には、属性、嗜好、評価も含む。

(3) 発話内の太字は空間要素対象部分、下線部は時間要素対象部分を示す。空間要素対象が明示されていない場合は、復元して空間要素を分類する。

3. 分析結果

3.1 会話ごとと話者ごとの修辭機能の出現

会話ごとと話者ごとの修辭機能の出現頻度・出現割合を表3、表4と図1に示す⁽⁴⁾。

表3 会話ごと・話者ごとの修辭機能の出現頻度

会話ID	話者	01 行動	02 実況	03 状況内 回想	04 計画	05 状況内 予想	06 状況内 推測	07 自己 記述	08 観測	09 報告	10 状況外 回想	11 予測	12 推量	13 説明	14 一般 化	計
Y010_002	母	8	27	10	26	3	0	28	23	0	0	1	0	11	0	137
	父	4	22	1	4	10	0	26	17	0	1	1	0	9	0	95
	かい	0	9	0	3	0	0	19	14	0	0	4	0	1	0	50
Y010_003	母	8	34	20	7	7	0	11	19	1	3	11	0	31	0	152
	父	7	19	9	9	7	0	22	25	0	0	4	0	28	0	130
	かい	3	11	4	7	2	0	20	3	0	1	5	0	5	0	61
Y010_005	母	10	17	10	6	3	0	21	40	0	3	0	0	15	0	125
	父	11	18	15	8	5	0	30	52	0	6	20	0	62	0	227
	かい	5	3	14	5	4	0	23	66	0	4	6	0	26	0	156
	靖広	10	6	9	15	6	0	21	68	0	6	5	0	72	0	218

表4 会話ごと・話者ごとの修辭機能の出現割合

会話ID	話者	01 行動	02 実況	03 状況内 回想	04 計画	05 状況内 予想	06 状況内 推測	07 自己 記述	08 観測	09 報告	10 状況外 回想	11 予測	12 推量	13 説明	14 一般 化
Y010_002	母	5.8%	19.7%	7.3%	19.0%	2.2%	0.0%	20.4%	16.8%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	8.0%	0.0%
	父	4.2%	23.2%	1.1%	4.2%	10.5%	0.0%	27.4%	17.9%	0.0%	1.1%	1.1%	0.0%	9.5%	0.0%
	かい	0.0%	18.0%	0.0%	6.0%	0.0%	0.0%	38.0%	28.0%	0.0%	0.0%	8.0%	0.0%	2.0%	0.0%
Y010_003	母	5.3%	22.4%	13.2%	4.6%	4.6%	0.0%	7.2%	12.5%	0.7%	2.0%	7.2%	0.0%	20.4%	0.0%
	父	5.4%	14.6%	6.9%	6.9%	5.4%	0.0%	16.9%	19.2%	0.0%	0.0%	3.1%	0.0%	21.5%	0.0%
	かい	4.9%	18.0%	6.6%	11.5%	3.3%	0.0%	32.8%	4.9%	0.0%	1.6%	8.2%	0.0%	8.2%	0.0%
Y010_005	母	8.0%	13.6%	8.0%	4.8%	2.4%	0.0%	16.8%	32.0%	0.0%	2.4%	0.0%	0.0%	12.0%	0.0%
	父	4.8%	7.9%	6.6%	3.5%	2.2%	0.0%	13.2%	22.9%	0.0%	2.6%	8.8%	0.0%	27.3%	0.0%
	かい	3.2%	1.9%	9.0%	3.2%	2.6%	0.0%	14.7%	42.3%	0.0%	2.6%	3.8%	0.0%	16.7%	0.0%
	靖広	4.6%	2.8%	4.1%	6.9%	2.8%	0.0%	9.6%	31.2%	0.0%	2.8%	2.3%	0.0%	33.0%	0.0%

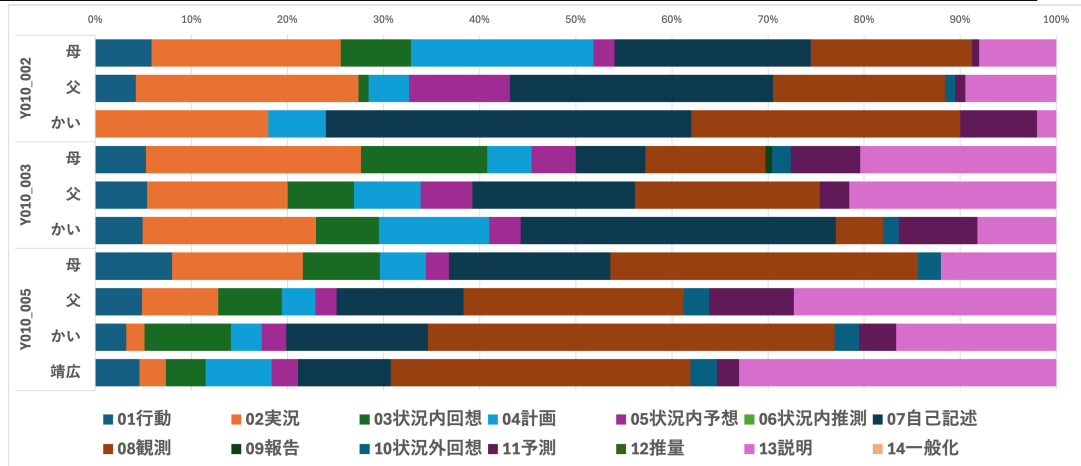


図1 会話ごと・話者ごとの修辭機能の出現割合

修辭機能の出現頻度を示す表3から、家族での会話(Y010_002、Y010_003)では、両親の発話が多く、子ども(かい)の発話は父や母の発話の半分以下程度であるのに対し、叔父(靖広)

⁽⁴⁾ アノテーションは会話ファイルごとにそれぞれ2名の作業者によって行われた。信頼性検討のためカッパ係数を求めたところ、Y010_002は $k=.6533$ でかなりの一致、Y010_003は $k=.5498$ 、Y010_005は $k=.5000$ で、適度な一致であることが確認された。

を交えた会話 (Y010_005) では、子どもの発話の割合が増えていることがわかる。また、修辞機能の出現割合を示す表 4、図 1 によると、家族での会話では、自分及び会話相手やその場の時空の事柄について述べる【実況】[02] が両親・子どもとも多く、また子どもは、自分あるいは会話相手の性質や習慣、嗜好について述べる【自己記述】[07] を多く使い、脱文脈度が【自己記述】[07] より低い修辞機能が半分以上である。一方、叔父を交えた会話では、父、子ども、叔父の発話では、その場にあるものの性質や習慣について述べる【観測】[08]、その場にはないものの性質や習慣について述べる【説明】[13] の割合が増え、脱文脈度が【観測】[08] より高い修辞機能が多くなっている⁽⁵⁾。

上述のように、出現頻度及び出現割合から、叔父を含む会話の方が、脱文脈度が高い修辞機能が用いられていることがわかったが、会話データと修辞機能との対応関係を調べるために、対応分析を行った。分析には R の ca 関数を用いた。結果を図 2 に示す。

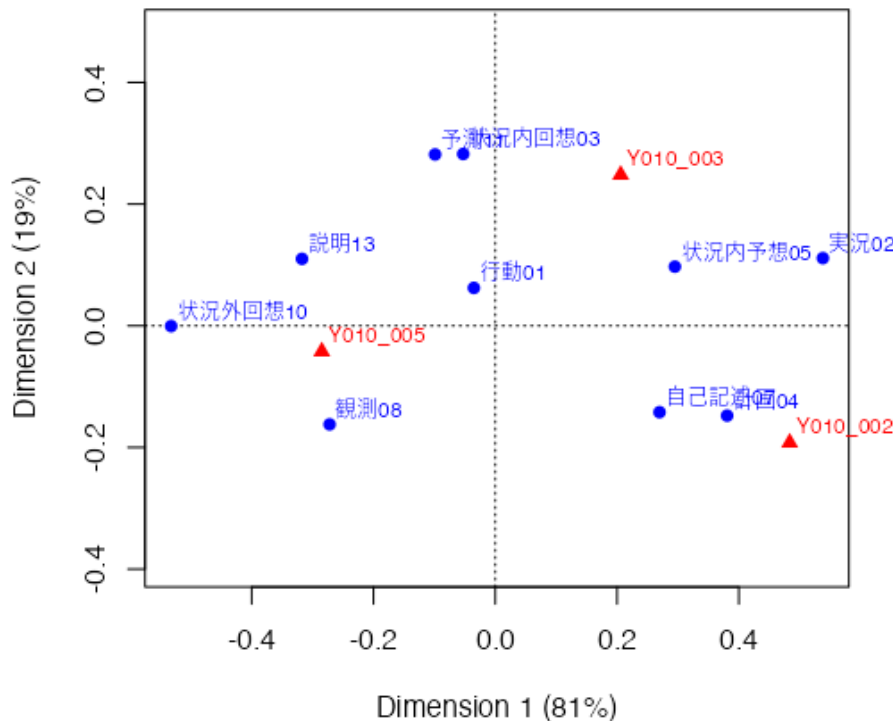


図 2 会話と修辞機能の対応

図 2 では、【行動】[01] が 3 つの会話の中央あたりに位置しており、時空を共有している話し言葉での特徴的な修辞機能が共通して用いられていることがわかる。横軸の右側には、家族との会話 (Y010_002 と Y010_003) が位置し、左側には叔父を含む会話 (Y010_005) が位置しているため、Dimension1 で会話の違いが示されていると考えられる。叔父を交えた会話は【観測】[08]、【状況外回想】[10]、【説明】[13] と関連があり、家族での会話は【計画】[04]、【自己記述】[07]、【状況内予想】[05]、【実況】[02] と関連がある。

⁽⁵⁾ Y010_005 での父母の発話の中には、喃語のみの発話のため分析から除外した弟に話しかけたり、弟の様子を述べるものが含まれている。また、母は授乳のため 17 分頃以降は弟とともに席をはずしており、それ以降は叔父、父、子ども (かい) の 3 人の会話となる。

図2の分析には大人と子どもの発話が含まれており、特に家族だけの会話では発話量の多い両親の発話の特徴が結果に強く影響している可能性があるため、大人3名と子どもに分けて同様に対応分析を行なった。大人の発話はほぼ図2と同様の配置となったため作図を省略するが、子どもの発話に限定して対応分析を行なった結果を図3に示す。

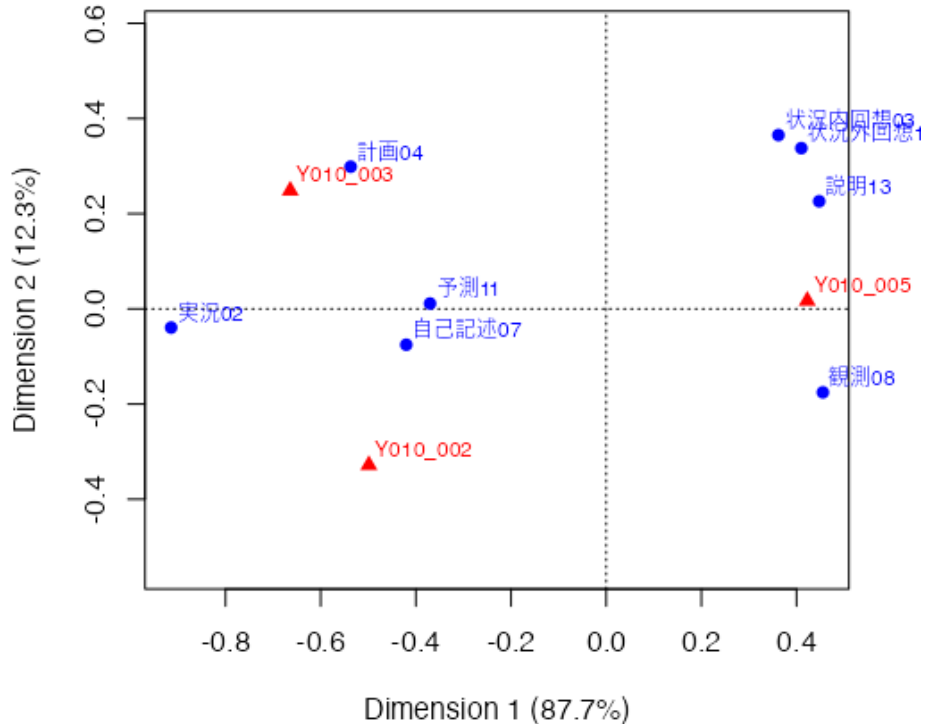


図3 子どもの発話と修辞機能の対応

図3より、子どもの発話では、横軸の右側に叔父を交えた会話（Y010_005）、左側に家族での会話（Y010_002、Y010_003）が位置しており、大人も含めた結果同様に、Dimension1が会話の違いを表していると考えられる。叔父を交えた会話では、【観測】[08]、【状況外回想】[10]、【説明】[13]といった脱文脈度の高い修辞機能については大人を含めた結果同様に用いられ、家族の会話では【実況】[02]、【計画】[04]、【自己記述】[07]といった脱文脈度の低い修辞機能が用いられていることが確認できた。

3.2 会話ごと話題内容ごとの修辞機能の出現

先行研究において、テーマを設定された作文や談話では、用いられやすい修辞機能はテーマとの関係が見られることや（田中ほか 2021, 2022）、会話参加者たち自身がとりあげた話題内容によっても、用いられる修辞機能が異なることが確認されている（田中ほか 2023a）。本研究の分析対象会話の話題内容を確認し、それぞれの修辞機能の出現頻度と割合を話者ごとに表5と図4に示す。

表5 会話ごと話題内容ごとの話者別修辭機能の出現頻度

会話ID	話題内容	話者	01 行動	02 実況	03 状況内 回想	04 計画	05 状況内 予想	06 状況内 推測	07 自己 記述	08 観測	09 報告	10 状況外 回想	11 予測	12 推量	13 説明	14 一般 化	計
Y010 _002	顔真似とパンダ	母	4	9	3	0	0	0	5	9	0	0	0	0	0	0	30
		父	2	9	0	0	0	0	2	4	0	1	1	0	0	0	19
		かい	0	3	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	7
	明日の朝食・おやつ	母	0	3	0	20	1	0	1	3	0	0	0	0	5	0	33
		父	0	1	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	5	0	10
	夕食	かい	0	5	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	8
		母	3	13	2	0	2	0	2	4	0	0	0	0	0	0	26
	幼稚園	父	2	12	0	0	0	0	3	5	0	0	0	0	0	0	22
		かい	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
		母	1	2	5	6	0	0	20	7	0	0	1	0	6	0	48
		父	0	0	1	4	6	0	21	8	0	0	0	0	4	0	44
		かい	0	0	0	2	0	0	18	10	0	0	4	0	0	0	34
Y010 _003	「お母さんといっしょ」	母	0	6	3	1	1	0	2	0	0	0	0	0	12	0	25
		父	2	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	11
		かい	0	2	1	1	0	0	4	0	0	0	0	0	1	0	9
	弟対応など	母	2	11	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	18
		父	1	3	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	9
	プレゼント	母	0	2	0	3	6	0	1	8	0	0	2	0	3	0	25
		父	0	0	0	3	5	0	4	5	0	0	3	0	3	0	23
	明日行くところ	かい	0	0	0	3	2	0	2	0	0	0	2	0	1	0	10
		母	0	0	1	2	0	0	0	3	0	0	1	0	6	0	13
		父	0	0	2	4	1	0	2	1	0	0	0	0	12	0	22
		かい	1	0	0	3	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	8
	夕食	母	5	14	11	0	0	0	3	3	1	2	0	0	2	0	41
父		4	11	2	1	0	0	12	11	0	0	1	0	6	0	48	
かい		2	9	0	0	0	0	9	2	0	0	0	0	0	0	22	
母		1	1	5	1	0	0	3	2	0	1	8	0	8	0	30	
幼稚園	父	0	1	4	1	1	0	4	3	0	0	0	0	3	0	17	
	かい	0	0	3	0	0	0	3	1	0	1	3	0	1	0	12	
	母	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	
	父	0	0	0	2	0	0	5	6	0	1	0	0	4	0	18	
Y010 _005	お酒	かい	0	0	0	1	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	4
		靖広	0	0	0	2	0	0	1	6	0	2	0	0	2	0	13
		母	4	2	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	9
	弟対応など	父	3	7	1	0	0	0	1	3	0	0	0	0	1	0	16
		靖広	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	5
	スイーツ	母	3	9	1	0	0	0	8	9	0	0	0	0	1	0	31
		父	2	7	0	0	0	0	6	6	0	0	0	0	1	0	22
	ドライブ	かい	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
		靖広	0	3	0	0	0	0	7	1	0	0	0	0	1	0	12
		父	1	0	1	5	0	0	3	0	0	0	0	0	2	0	12
		かい	2	0	0	1	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7
	プレゼント	靖広	5	0	0	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
父		0	1	4	0	3	0	2	7	0	0	17	0	11	0	45	
結婚式・コロナ・帰省	かい	0	0	0	1	3	0	3	3	0	0	5	0	7	0	22	
	靖広	2	0	0	2	1	0	1	5	0	0	5	0	6	0	22	
	母	0	1	0	4	2	0	4	2	0	0	0	0	2	0	15	
	父	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	3	
電車・新幹線	かい	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	靖広	0	0	1	3	1	0	0	3	0	0	0	0	6	0	14	
	母	0	0	3	1	0	0	2	3	0	1	0	0	5	0	15	
	父	2	2	7	1	1	0	9	9	0	2	3	0	29	0	65	
電車のおもちゃ	かい	1	1	6	1	0	0	4	6	0	4	0	0	11	0	34	
	靖広	0	1	4	3	1	0	6	15	0	3	0	0	40	0	73	
	母	3	4	2	0	0	0	6	22	0	2	0	0	6	0	45	
	父	3	1	2	0	1	0	3	20	0	2	0	0	10	0	42	
風邪	かい	1	1	7	0	0	0	12	55	0	0	1	0	7	0	84	
	靖広	0	0	3	0	0	0	6	36	0	1	0	0	14	0	60	
	母	0	1	3	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	8	
	父	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	4	
	かい	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	
	靖広	1	1	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2	0	7	

家族での会話は、夕食という場面で、幼稚園や運動会、明日のことなど身近な話題について話されている。一方、叔父を交えた会話では、叔父の結婚式や帰省、電車・新幹線、電車のおもちゃなどさまざまな話題がある。子どもは家族との会話の中での発話は多くないが、例えばY010_002では、幼稚園の話題で【自己記述】[07]、【観測】[08]を用いており、「(幼稚園で)

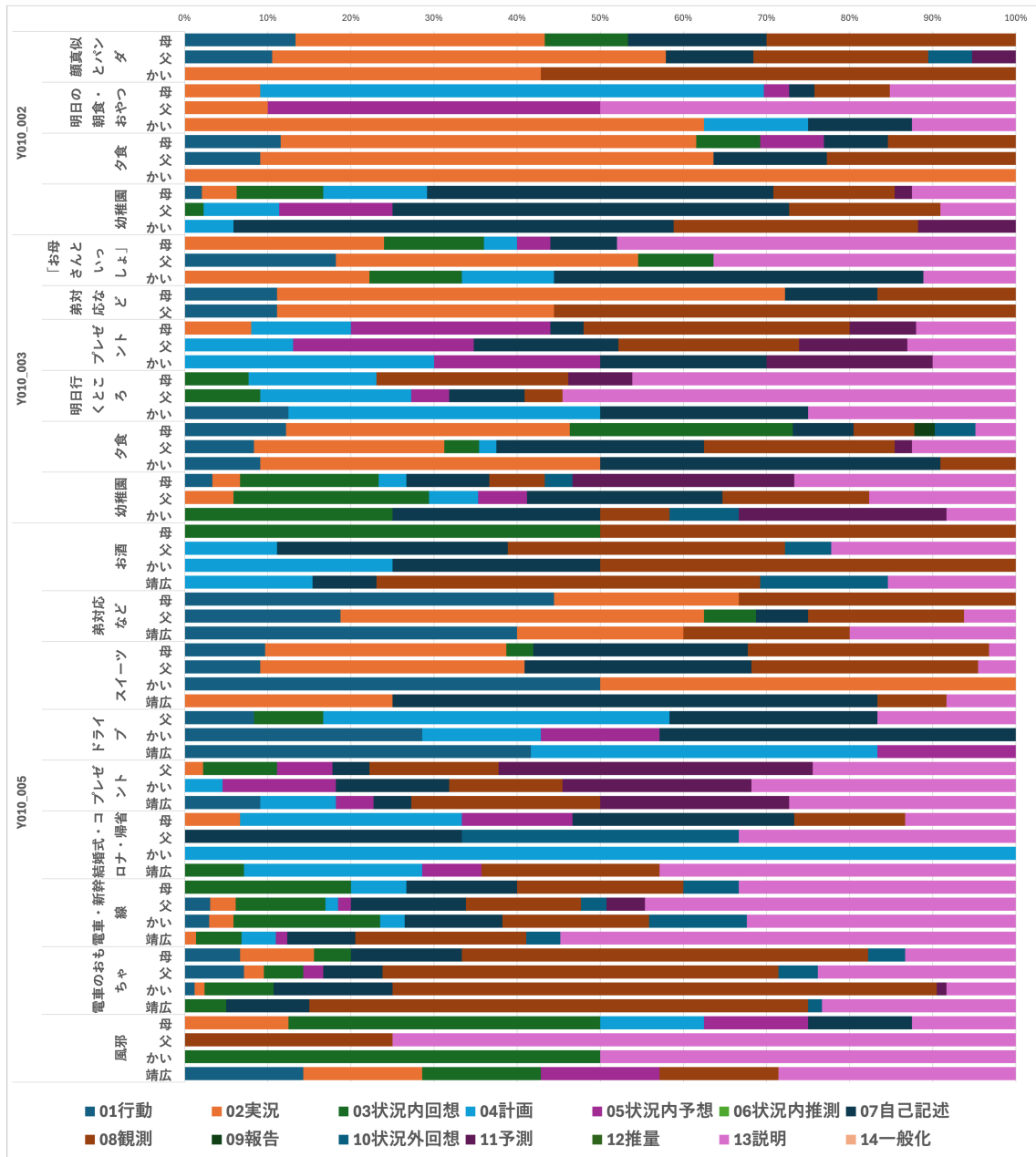


図4 会話ごと話題内容ごとの話者別修辭機能の出現割合

できないことがあるから」(命題&習慣・恒久&状況内→【観測】[08])「(僕は)やだな。」(命題&習慣・恒久&参加→【自己記述】[07])のように、幼稚園に行きたくないことを繰り返している。また Y010.003 では「(もちあげたお肉が)重すぎた。」(命題&現在&状況内→【実況】[02])のように、夕食を食べながら起こっていることを描写したり、「(僕は)こまちしよう。」(命題&未来意志的&参加→【計画】[04])、「(僕たちは)りんかい線に乗ろう。」(命題&未来意志的&参加→【計画】[04])のように、両親とのやりとりの中で応答したりしている。

一方、叔父を交えた会話では、「電車のおもちゃ」と「電車・新幹線」の話題で【観測】[08]、【説明】[13]が多く、また【状況内回想】[03]、【自己記述】[07]、【状況外回想】[10]についても

用いている。「電気がね、電気が点く。」(命題&習慣・恒久&状況内→【観測】[08])、「これ繋げたらこっちも走るってこと。」(命題&習慣・恒久&状況内→【観測】[08])、「七百系が東海道新幹線なの。」(命題&習慣・恒久&状況外→【説明】[13])、「(マクドナルドのハッピーセットの)ドクターイエローもめっちゃめっちゃめっちゃめっちゃね前。」(命題&過去&状況内→【状況内回想】[03])、「(僕は)そうゆうこまち持ってるじゃん。」(命題&習慣・恒久&参加→【自己記述】[07])、「そこになんかね N七百系が通ってたの。」(命題&過去&状況外→【状況外回想】[10])のように、「電車のおもちゃ」では、自分の腕を使って仕組みを説明したり、その場にあるプラレールを入手した経緯を説明し、「電車・新幹線」では、電車や新幹線の種類について説明したり、新幹線を見たことを伝えたりしている。

4. 考察

田中・小磯(2019)では、両親と話す女兒(0~4歳⁽⁶⁾)は、両親の脱文脈度の高い発話をきっかけとして脱文脈度の高い発話を用いていることを示した。本分析データにおいても、子どもは両親との会話で両親が使用していない修辭機能を用いたり、叔父を交えた会話で大人が用いない修辭機能を用いることはなく、その場面に応じた修辭機能が用いられていると考えられる。本分析のデータでは、家族での会話では身近な話題について話され、叔父を交えた会話では、叔父の結婚式や帰省、電車・新幹線、電車のおもちゃなどさまざまな話題が話され、家族での会話より叔父を交えた会話の方が脱文脈度の高い修辭機能が用いられていた。この家庭では親子ともに電車好きで、話題内容「プレゼント」でもプラレールやマクドナルドのハッピーセットの電車の話が交わされている。

本分析では、上述のように叔父を交えての会話の方が脱文脈度の高い発話が見られたが、この結果は、家族内では脱文脈度の高い発話は見られないことを示すものでも、親戚など家族以外の存在がある方が脱文脈度の高い発話が見られることを必ずしも示すものでもない。Y010_003の家族との会話では話題内容「明日行くところ」の中で、「京成スカイライナーは遠すぎるから」(命題&習慣・恒久&状況外→【説明】[13])「だからりんかい線に乗ろう」(命題&未来意志的&参加→【計画】[04])という子どもの発話があるように、家族との会話でも脱文脈度の高い発話は生じる。ただし、夕食という場面で身近な話題について話すことも多く、相対的に脱文脈化度の低い発話が多くなる可能性はある。一方、Y010_005では、久しぶりに来訪した叔父はそれほど電車に詳しくない様子で、子どもは父とともに電車や電車のおもちゃのことを叔父に熱心に説明している。普段会わない人と話す機会を得て、興味のあるものについて説明したり質問されたりすることが、脱文脈度の高い発話を生じさせる結果となることはありえるだろう。

5. まとめと今後の課題

本発表の目的は、家庭での家族の会話と親戚を含む会話における子どもの発話の修辭機能及び脱文脈度の違いを明らかにすることであった。家庭での親子の談話データと、叔父を交えた

⁽⁶⁾ CEJC では年齢は5歳刻みで示されている

談話データを対象として、それぞれの発話について言語表現から修辞機能と脱文脈度を特定し、用いられている修辞機能を確認した。その結果、家族での会話と叔父を交えた会話には、特徴となる修辞機能が見られ、その特徴は、子どもの発話だけでも同様の傾向が見られることがわかった。このことから、子どもの用いる修辞機能はその場で大人が用いている修辞機能の影響を受けることが伺える。また、修辞機能と脱文脈度は、談話における話題内容によって異なることが確認され、作文のテーマや談話の話題について先行研究で明らかになっていたことを再確認した。本分析では親戚を含む会話において家族の会話より脱文脈度が高いことが示されたが、必ずしも親戚がいる方が脱文脈度が高くなるわけではないと考えられる。しかし、普段会わない人と話す機会を得て、興味のあるものについて説明したり質問されたりすることが、脱文脈度の高い発話を生じさせる結果となることはありえるだろう。本分析は、対象としたデータが家族との会話が2件と親戚を交えた会話が1件のみであった。今後分析対象を増やし、検討を加える予定である。

謝 辞

本研究は国立国語研究所のプロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」、JSPS 科研費 JP20H01264、JP23H00630 によるものです。

文 献

- C. Cloran (1994). "Rhetorical units and decontextualisation: An enquiry into some relations of context, meaning and grammar." Unpublished doctoral dissertation, University of Nottingham Nottingham.
- C. Cloran (1999). "Contexts for learning." Frances C (Ed.), *Pedagogy and the Shaping of Consciousness: Linguistic and Social Processes*. London: Continuum International Publishing. pp. 31–65.
- 岩田純一・石田勢津子・落合正人 (1995). 『児童の心理学』 有斐閣, 東京.
- 岡本夏木 (1985). 『ことばと発達』 岩波書店.
- 小磯花絵・石本祐一・居關友里子・江口典子・柏野和佳子・川端良子・田中真理子・田中弥生・西川賢哉 (2024). 『『子ども版日本語日常会話コーパス』モニター版の概要』 言語資源ワークショップ発表論文集 1 巻. 国立国語研究所.
- 佐尾ちとせ・宮城信・田中弥生 (2023). 「修辞機能分析を活用した作文指導」 日本語習熟論研究:1, pp. 140–158.
- 佐野大樹 (2010). 『日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver.0.1.1: 選択体系機能言語理論 (システムック理論) における談話分析 (修辞機能編)』, <https://researchmap.jp/kotonoha/>資料公開/.
- 佐野大樹・小磯花絵 (2011). 「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証 - 「書き言葉らしさ 話し言葉らしさ」と脱文脈化言語 文脈化言語の関係 -」 機能言語学研究, 6, pp. 59–81.
- 田中弥生 (2017). 「相談における談話構造: 修辞機能と脱文脈化の観点からの分析」 言語資

- 源活用ワークショップ発表論文集, 1, pp. 69–78.
- 田中弥生 (2022). 「修辞機能と脱文脈化の観点からの日本語談話分析」 博士論文 (未公刊), 東京大学大学院総合文化研究科.
- 田中弥生・江口典子・小磯花絵 (2023a). 「家庭での食事場面における親子会話の脱文脈度の観点からの分析」 言語資源ワークショップ発表論文集 1 巻, pp. 329–339. 国立国語研究所.
- 田中弥生・小磯花絵 (2019). 「家庭での幼児の発話の修辞機能：脱文脈化の観点からの検討」 言語資源活用ワークショップ発表論文集:4, pp. 106–118.
- 田中弥生・小磯花絵・大武美保子 (2022). 「脱文脈化の観点から見た共想法に基づく高齢者談話の分析」 国立国語研究所論集:22, pp. 137–155.
- 田中弥生・小磯花絵・大武美保子 (2023b). 「共想法による話し言葉・書き言葉における修辞機能の特徴－テーマとの関係に着目して－」 言語処理学会第 29 回年次大会発表論文集, pp. 1356–1360.
- 田中弥生・佐尾ちとせ・宮城信 (2021). 「児童作文の評価に向けた脱文脈化観点からの検討」 言語処理学会 第 27 回年次大会 発表論文集, pp. 750–755.
- 橋本憲尚 (2009). 「学校教育と知能観の再考：”状況に埋め込まれた学習”の視点から」 佛教大学総合研究所紀要:16, pp. 1–18.